

平成21年度 京都府立大学地域貢献型特別研究 (ACTR) 成果

分類 番号	B1	取組 名称	京都のドイツ文化受容——江戸期から平成期までの学際的研究
研究代表者： 文学部 准教授： 青地 伯水			
研究担当者： 京都府立大学（渡邊伸、吉岡真佐樹、横道誠、吉岡いずみ、浅井麻帆、深見茂（敬称略））			
主な連携機関（所在市町村、機関（部署）名）			
なし			
【研究活動の要約】			
<p>●第1回研究会 8月5日</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究会の方針確認・日程の検討 3月13日公開シンポジウム「祇園祭から世紀末ウィーンまで——京都のなかのドイツ文化」についての取り組み 書籍『京都の中のドイツ』（春風社を予定）刊行に向けて 報告 渡邊 伸「ドイツでの日本・京都のイメージ形成」 <p>●第2回研究会 3月1日</p> <p>報告1 深見 茂 「祇園祭山鉾行事の運営とゲルマニスト——ドイツ市民文学研究者の京都町衆としての視点」</p> <p>報告2 浅井 麻帆「ウィーン分離派と京都」</p> <p>報告3 吉岡いずみ「女性と社会——ドイツの運動と京都」</p> <p>報告4 横道 誠 「調和と東洋観——ブルーノ・タウトの『アルプス建築』と『桂回想』」</p> <p>報告5 吉岡真佐樹「大正期京都における社会教育論の可能性——海野幸徳の社会事業論・社会教育論とドイツ社会教育学」</p> <p>報告6 青地 伯水「京都学派による近代の超克(2)——「世界史的立場」と「モラリッシュ・エネルギー」」</p>			
【研究活動の成果】			
19世紀の末に急速に近代化したドイツと日本とは多くの点で類似する歴史を歩んできました。その中でも近代化に立ち遅れ気味であった京都が、いかにドイツ受容に熱心であったかは、建築、芸術、教育、思想などの分野で明らかになりました。また昭和にはいって、京都における近代を乗り越えるための模索においても、ドイツは重要な役割を果たしました。建築・美術・思想においても、ドイツの影響を明らかにしたことは、所期の目的を果たしたと言えるはずです。			
【研究成果の還元】			
<p>●公開シンポジウム 「祇園祭から世紀末ウィーンまで——京都のなかのドイツ文化」3月13日（土）13:00～16:00</p> <p>京都府立大学・合同講義室棟 第7講義室 司会 青地伯水 参加者約100名</p> <ol style="list-style-type: none"> 講演「祇園祭山鉾行事の運営とゲルマニスト——ドイツ市民文学研究者の京都町衆としての視点」深見茂 報告①「女性と社会——ドイツの運動と京都」吉岡いずみ ②「ウィーン分離派と京都」浅井麻帆 ③「タウトの『桂回想』——水墨画とドイツ語テキスト」横道誠 パネル・ディスカッション（メンバー全員） <p>●研究成果報告書「京都のドイツ文化受容——江戸期から平成期までの学際的研究」2010年3月31日 研究代表者・青地伯水 図書館で閲覧可</p>			
【お問い合わせ先】文学部 青地研究室			
Tel: 075-703-5249 E-mail: h_aoji@kpu.ac.jp			

参考

2010年3月13日(土)のシンポジウムの写真です。



会場からの質問を受け、パネル・ディスカッションも盛り上がりました。



大盛況で、100人もの来場者がありました。